

やま うえ き くも はなし

# 山の上の木と雲の話

小川未明

山やまの上うえに、一本いっぽんの木きが立たっていました。木きはまだこの世よの中なかに生うまれてきてから、なにも見みたことがありません。そんなに高たかい山やまですから、人にんげんも登のぼってくることもなければ、めったに獣けもの物ものも上のぼってくるようなこともなかったのです。

ただ、毎まい日にち聞きくものは、風かぜの音おとばかりでありました。木きはべつに話はなしをするものもなければ、また心こころをなぐさめてくれるものもなく、朝あさから夜よるまで、さびしくその山やまの上うえに立たっていました。同おなじ木きでも、にぎやかな都と会かいの中なかにある公こう園えんにあつたならば、毎まい日にち、いろいろな物ものを見み、またいろいろな音おとを聞きいたであります。しかし、この木きはそんなことがなかったのであります。

夜よるになると、遠とくで獣けもの物のほえる声こゑと、永えい久きゅうに黙だまって冷つめたく輝かがやく星ほしの光ひかりと、いずこへともなく駆かけてゆく、無むじよう情じようの風かぜの音おとを聞きいたばかりであります。

しかし、この木きにただ一いち度ど忘わすれがたい思おもい出でがあるのであります。それは、ある年としの夏なつの夕ゆう暮ぐれ方がたのことでもあります。あんなに美うつく

しい雲を見たことがありません。その雲は、じつに美しい雲でした。にこやかに笑っていました。体には、紅・紫・黄・金・銀、あらゆるまばゆいほどの華やかな色彩で織られた着物をまとっていました。髪は、長く、黄金色の波のようにまき上がっていました。その雲は、おそらく大空の年若い女王でありましたでしょう。ゆうゆうと空を漂って、この山を過ぎるのです。

木は、魂まで、ぼんやりとして、ただ夢心地になって、空を見上げていました。

「なんという美しい雲だろう。あんな美しい姿のものが、この宇宙にはすんでいるのだろうか？」

と、木は思っ、ながめていました。

すると、その雲は、ちょうど木の立っている山の上にさしかかりました。木は、見上げれば、見上げるほど美しいので、気も遠くなるばかりでした。このとき、ちょうど、鈴を振るような、やさしい声をして、雲は下を見て、

「ああ、まっすぐない木だこと。風にも、雪にも折れないで、よく育ちましたね。ほんとうに強い、雄々しい若い木ですこと。どんなにこの山の上に一人で立っているのではさびしいでしょうね。しかし、忍耐をしなければなりません。わたしは、また、きつともう一度ここへやってきますよ。それまでは、達者でいてください。

いろいろのおもしろい話や、珍しいこの世界じゆうでわたしの見  
てきた話をしてあげますよ。」と、木に向かつて雲はいいました。

木は、ほんとうに夢とばかり思ったのです。そして、このときばかりは、自分ほど、幸福なものは世の中にないと思いましたが、いつまでも木は、この美しい雲をば見ていたかったです。また、翼があつたら、自分も飛んで雲の後を追って、いっしょに旅をしたいと思いました。しかし、木には、もとよりそれができなかつたのです。そのうちに、だんだん雲の姿は、遠ざかってしまいました。

その日から、木は、この雲の姿を忘れることができませんでした。そして、もう一度ここへやってくるといった雲の言葉を思い出して、毎日さびしい日を送っていました。

しかし、それからというものは、けっして、そのような美しい雲をば木は、見なかつたのです。夏も去ってしまい、秋にもなつたけれど、この美しい雲は、ふたたび目のとどくかぎり、空に姿を現しませんでした。

木は、深い、深い、愁いに沈みました。毎日、山の頂を通る雲は、灰色の物悲しいものばかりでありました。

木が、こうして悲しみに沈んでいましたとき、からすがやってきて、

「なんで、そんなに悲しんでいるのですか？」と、木に向かつて聞

いたのであります。

木は、心の中の悲しみを隠していることができませんでした。

そして、からすが、さもしんせつにいつてくれましたので、木は雲の話をして、

「おまえさんは、羽があつて、遠いところまで旅をなさるから、もし、その雲をごらんになったら、私に教えてください。」と、木はからすに向かつて頼みました。すると、からすは、

「そうです。私は、海の方へも飛んでゆきます。また広い野原へも、ときには、村へも飛んでゆきます。けれど、このごろはどこへいっても、これと同じ曇った空色で、かつてそんな美しい雲を見たことはありません。私も気をつけていますが、もしつぐみがこのにきましたら、よく聞いてごらんなさい。あの鳥は、諸国を飛びまわりますから……。」と、木に向かつていいました。

哀れな木立は、さも頼りなさそうに見えました。からすは、やがて別れを告げて去ってしまいました。それから幾日もたった冬のはじめです。つぐみが、どこからかやってきて、この木の枝に止まりました。木は、からすのいったことを忘れずに、さっそく雲の話をしました。

「つぐみさん、どこかでこんなような雲をごらんになりましたか？」と、木は、鳥に向かつて聞きました。

敏捷びんしょう そうな つぐみは、小さくちい びをかしげながら、考かんが えていま  
したが、

「あ、見み ましたよ。それは、ここからは、たいそう遠とお いところであ  
ります。海うみ を越こ えて、あちらのにぎやかな都と 会かい でありました。ある  
日ひ の晩方ばんがた、私わたし は、その都と 会かい の空そら を、急いそ いでこっちに向む かって旅たび を  
していますと、ちょうどあなたのおっしやる美うつく しい雲くも が、都と 会かい の  
空そら に浮う かんでいました。下した には、とがった塔とう や、高たか い建た 物もの などが重かさ  
なり合あ って、馬車ばしや や、自じ 転てん 車しや などが往お 来うらい の上うへ を走ま っていました。そ  
して、街まち の中なか は、たそがれかかって、燈とも 火しび が、ちらちらと水玉みずたま の  
ようにひらめいていました。」と、つぐみはいいました。

これを聞き いていた木立こだち は、深ふか いため息いき をもらしました。

「いまは、そんなに遠とお いところに、雲くも はいつてしまったのですか。」  
と、木き は、さびしさにたえられなかったけれど、雲くも の無ぶ 事じ なのを聞き  
いて安あん 心しん いたしました。

「どうか、また、その雲くも をごらんになったら、私わたし のことをよく告つ  
げてください。」と、木き は、つぐみに頼たの みました。

「きつと、あなたのことを雲くも に告つ げますよ。私わたし は、もう明あ 日した はこ  
こを去さ って、遠とお くへゆきますから、また、どこかで、あくも の雲み を見み  
すでしょう。」と、つぐみはいいました。

木き は、またこのつぐみとも別わか れなければなりませんでした。こう

して、さびしく山やまの上うえに一人ひとりいつまでも残のこされたのであります。

それから毎日まいにち、情つれない風かぜは木きを揺ゆりました。雪ゆきは、舞まってき  
て枝えだにかかりました。そして、明あけても暮くれても、灰はい色いろの雲くもは、頭あたま  
の上うえをゆきました。

いつになったら、木きは、あうつくましい雲くもの姿すがたを見みるでありましよ  
う。また、夏なつがめぐってくるには、長ながい間まがあつたのです。

初出…「読売新聞」大正十一年三月